

『女の一生』における「食」 Eating in Maupassant's *Une Vie*

北川 美香
KITAGAWA Mika

要 旨

19世紀フランスを代表するリアリズム作家モーパッサンは、現実世界を忠実に描くことを旨としていた。そのため、実生活に欠かせない要素である「食」は、作品で取り扱われる重要テーマの一つに数えられる。彼の長編小説『女の一生』（1883）を俯瞰すると、労働者階層に関しては、食欲と密接に結びついた本能的な行動として「食」が描かれるのに対し、富裕階層については、栄養補給と切り離された社交としての「食」が中心に据えられている。冒頭部、主人公ジャンヌは貴族の娘として何不自由ない生活を送り、儀式的な「食」を享受している。しかし、小説後半、家族の死や息子の放蕩などにより彼女は経済的に困窮していく。それに伴って食事は社会的価値を失い、命を繋ぐのに欠かせない本来の役目を果たすに過ぎなくなる。これは、主人公の経済的・社会的地位低下、ひいては当時の貴族層の没落を如実に表している。モーパッサンは『女の一生』における「食」を通じて、産業の発展と共に相対的な収入低下から経済基盤が緩やかに崩壊していく貴族階級の終焉をも描こうとしたのではないだろうか。

Abstract

Maupassant, one of the most famous French realism writers in the 19th century, aimed to describe the real world accurately. Thus, "eating", which cannot be ignored in daily life is a main theme in his works. In Maupassant's novel *Une Vie* (1883), the act of eating for laborers is related to their appetite, while aristocrats' eating habits are viewed as a social activity. However, as the novel continues, the heroine, a daughter of a baron falls into poverty. During this time, her meals are deprived of their social meanings and become an indispensable element of survival. This fall clearly reflects the degradation in the status of the heroine and also the decline of aristocracy because of the relative decrease of the income through the industrial development in the late 19th century in France.

キーワード：モーパッサン、『女の一生』、食

keywords：Maupassant, *Une vie*

はじめに

映画『レ・ミゼラブル』が予想以上にロングランとなり、日本におけるミュージカル映画史上最高の興行収入を上げたのは、まだ記憶に新しい。19世紀のいわば全く時代遅れの小説が、習慣も文化も大きく異なる現代日本に生きる私たちが魅了したのはなぜだろうか。『レ・ミゼラブル』はヴィクトル・ユゴーが1862年に執筆したフランス文学の巨編で、19世紀フランスの懸命に生きる人々の暮らしや心の動きが細やかに描かれている。時代や場所が違って、人間の生活するありさまやその時々抱く感情には相通ずる点があるからこそ、私たちの心を揺さぶったのではなからうか。

同じく19世紀フランスを代表するリアリズム作家モーパッサンにとっても、日常生活や登場人物の心情に関する描写は小説に欠かせない要素であった。その中で

も「食」は最も重要な因子の一つである。なぜならば、彼は作品の中で現実世界を忠実に描くことを旨とし、人間の欲望を正面から見据えたので、人間の3大欲求の一つに数えられる「食欲」を満たすための「食」は、当然避けては通れないテーマのはずだからだ。この点については、モーパッサンの処女小説『脂肪の塊』を取り上げた拙論で詳しく論じている¹⁾。モーパッサンと「食」の関係については他の研究者も多くの興味深い指摘を行ってきた²⁾。

本稿ではモーパッサンの「食」の問題を考える素材として、長編『女の一生』（1883）を取り上げてみたい。筆者は以前この小説の宴会シーンをフロベールの『ボヴァリー夫人』と比較したことがある³⁾。そこでも『女の一生』における「食」の重要性を考察したが、残念ながら紙面の都合上、宴会場面以外を検討する余裕がなかった。そのため、本稿では『女の一生』のストーリー

全体に対して「食」が果たす役割を追いながら、「食」の使い方の移り変わりが小説の構造にいかに関わってゆくのかを論じてみたい。

I 「食」の社会的側面

本来、「食」はヒトを含め、あらゆる動物が生命を維持していくために不可欠な私的営みであった。しかし、それと同時に、人間が高度な文化を作り上げていく過程で食の文明化が進み、食べる行為も他者の目を意識した身体技法を必要とする公的な意味が付加されてきた。つまり、文明の発展と共に「食」には生物学的側面以外に社会的及び文化的な意味合いが付け加えられるようになった訳だ⁴⁾。

従って、食べ物を消費することは、単に栄養素を摂取したり、最低限の食欲を満たしたりする本能的行動にとどまらない。食事は人間社会の中で儀式的な意義を付与されている。私たちの食生活を顧みても、食べ物を他の人々と共有する行為は社交の開始を意味し、複数の人間と一緒に食事をするとは、その集団のアイデンティティを強化する一面がある。日本社会での営業活動における会食の重要性に今更触れる必要はないだろう。「食」に栄養補給の重要性をさほど与えない富裕階層であれば、このような社会的意義はより一層強化されると思われる。言い換えると、各人の社会的地位に応じた食生活の営みがあることは想像に難くない。

19世紀フランス社会においても、収入や社会階層によって、食にかかる費用や食に求める目的は異なっていた⁵⁾。『女の一生』に目を転じると、モーパッサンがこの差異を描き分けていると指摘するのはたやすい。社会階層に応じた「食」の分析を行うため、手始めに主人公ジャンヌの実家がどのような経済状況に描かれているのか概観しておこう。

II 主人公を取り巻く財政状況

ジャンヌの両親ル・ペルテュイ・デ・ヴォー男爵夫妻はノルマンディーの地方貴族で、父祖伝来の農場は31箇所を数え、その地代で充分裕福な暮らしが送れるはずという設定になっている。上手く管理すれば年間3万フラン(=約3000万円)の収入が得られる土地を保有しているのだ⁶⁾。しかし、男爵夫妻は経済観念に乏しく、家政の切り盛りが下手な為、小説前半にして既に9箇目の農場を売り払っている⁷⁾。夫妻は土地を切り売りして生計を立てていることに切迫感がなく、無造作にお金を使うことを大きな幸せの一つと考えていた。モーパッサンは男爵夫人に「お金なんて使うために出来ているのですよ」という口癖を授けている⁸⁾。すなわち、男爵夫

妻は無為に毎日を送るだけの経済的余裕があり、日々の暮らしに困った経験のない生活能力に欠けた人物に造形されている。ジャンヌはそういった両親のもとで育てられて、当然のことながら浪費家に成長する。新婚旅行に出掛ける際も、母親から貰った2千フラン(=約200万円)の金貨を膝の上にばらまいて、嬉しさに手を叩きながら、「これで思い切り遊びましょうよ」とはしゃいでいる。財布から紙幣や硬貨が散乱する場面は、ジャンヌが修道院を出て、両親と共に別荘へ向かうシーンにも見られ、ジャンヌはそこでもお金を自由に使えることに興奮を隠せない。男爵家の人々が示す金銭に対する無頓着ぶり・浪費傾向を象徴する場面と呼べるだろう⁹⁾。モーパッサンが主人公やその両親にこのようなルーズな金銭感覚を与えたのは、小説後半での彼らの没落を不自然に感じさせない為の配慮であろう。

一方、ジャンヌの夫は、父親の負債を全て払ってしまうと僅かな収入と手狭な家しか残らない没落子爵に設定されている。そのような状況を生き抜くために、何かにつけて節約を実行しないと気が済まない人物に描かれる¹⁰⁾。現代日本なら、褒められこそすれ、貶されるはずのない模範的生活態度かもしれない。しかしながら、婿が将来の経済的困窮を心配して警告するのに対し、男爵夫妻とジャンヌは感謝するどころか、滑稽に感じて笑い転げる。男爵たちには、金銭を話題にするのさえ不作法と感ぜられるからだ。さらに、彼らの無造作な浪費に対し、婿が「金を窓から投げ捨てない習慣を身につけられないのか」と苦言を呈する場面すら見つけられる¹¹⁾。婿の性格をこのように極端な吝嗇に設定することで、モーパッサンはジャンヌたちの経済感覚の欠如を浮き彫りにし、その繁栄の危うさを読者に予見させているのだろう。

とは言っても、婿ジュリアンも没落しているとはいえ、貴族には相違なく、年に5-6千フラン(=約5-600万円)の収入が上がる地所を保有する、働かずに食べていける身分なのである。ところが、いわゆる庶民階級に属する人々は、僅かなお金を稼ぐために懸命の努力をしている姿が小説の各所に窺える。例えば、ジャンヌの小間使いロザリは、人々がパンを得るために必死で働いたり、日雇いの仕事で朝6時に起きたりしている事実を引き合いに出して、甘えた愚痴を吐く女主人を諭す。また、私生児を孕んだロザリと結婚する農夫は、男爵がロザリに託してくれる持参金の吊り上げに余念がない¹³⁾。娘の結婚に際して「一生の幸せに金銭など関係ない¹⁴⁾」とモーパッサンは男爵に言わせるが、男爵家とは対照的に、労働者階級にとって金銭は人生の最重要事項なのである。

III 社会階層による「食」の相違点

このような経済的に余裕のある貴族階級と食べるため

に働かざるを得ない庶民階級の経済格差は、「食」に対する態度にも如実に表れている。

一例として、まず食材の扱い方を取り上げてみよう。男爵とジャンヌが散歩に訪れた漁村では、むさくるしい家の中で一つしかない部屋に数家族がひしめき合って生活している。臭気が漂ってくるほどの人間の過密ぶりが描写される。漁師たちは家族が餓死しないように毎晩命を懸けて海に繰り出すが、貧困のせいで肉を口にしたこともない悲惨な境遇が畳みかけられる¹⁵⁾。しかし、貧困にあえぐ漁村の生活環境は、ジャンヌの同情を誘いはしない。彼女の眼には、漁師家族を取り巻く過酷な生活状況は舞台設定のようで、現実味が無いと感じられる。この場面で魚は、漁師が命を危険にさらして得た貴重な経済資源を意味する。しかし一方で、ジャンヌ達にとって魚は単なる遊び道具や無駄に重い荷物に過ぎない。ジャンヌはその漁村で気まぐれから舌平目を一匹買い求める。当初、ジャンヌも男爵も新しい玩具を手に入れたかのように喜んでいるが、徐々に魚を運ぶのに腕が疲れてしまい、魚の脂ぎった尻尾は草の上をひきずられる¹⁶⁾。食材とは思えないぞんざいな扱いを受けている。モーパッサンは故意にこのように対照的な描写を用意することで、両階級を隔てる溝の大きさを読者に突き付けているのだろう。

さらに、男爵が農業・漁業に向き合う態度は、所詮金持ちの道楽に過ぎない甘えたものと軽視される。例えば、土地の所有者として、男爵は小作農家に農業上のいろいろな工夫を提案するが、農夫たちは男爵のやり方を少しも信用しない¹⁷⁾。また、漁師のまねをして男爵が釣りに手を出してみるシーンもある。しかしながら、男爵の釣りは、魚がもがいている様子を面白がって眺めているだけで、漁師のように生活がかかっている訳ではない。その証拠に漁師たちが危険を覚悟で夜釣りに出掛ける様子を目にして、男爵は「実に素晴らしい」と実感を伴わない無責任な賛辞で形容する¹⁸⁾。現実を抛り所としない表層的な自然礼賛と呼べるだろう。

以上のように、モーパッサンは貴族階級と労働者階級の生活に対する姿勢の違いを「食」を通して明確にしている。

では、生活の糧を得ようと毎日重労働を強いられる農民・漁師にとって、「食」は常に肉体を生かし続けるための役割しか担わないのだろうか。それ以上の意味が与えられている場面を『女の一生』の中でも少なからず確認することが出来る。稀に行われる祭りや結婚披露宴は庶民が生活の憂さを晴らす格好の娯楽として機能しているのだ。

『女の一生』に現れる船の命名式及びジャンヌの結婚披露宴では、農民・漁師にも無料で御馳走が振る舞われる。地域の人々が満足するまで浴びるように飲み食いし、

踊りや歌に興じる描写にかなりの行数が割かれている。普段のストレスを解消し、本能の赴くままに自己を解放している労働者階級の様子が確認できる。

第一に、物語の導入部近くで展開される小舟「ジャンヌ号」の命名式を検討してみよう。名づけ式が終わると、漁師たちは台所の匂いを想像して、唾液が沸き上がり、嬉しさの余りつい歌を口ずさんでしまう。男爵の別荘では美味しい昼食が参列者を待っている。食事が終わると、庭での宴会は漁師に任せられ、貴族たちは屋敷の反対側へと退く¹⁹⁾。宴会騒ぎの中心に据えられるのは漁師であって、本来命名式を執り行った男爵ら貴族層ではない。小舟の名付け親であり、最も中心となるべきジャンヌが食事を楽しむ描写は全く存在せず、彼女は夢想到に忙しんでいる。

もう一方のジャンヌの結婚披露宴では、農民たちは戸外でリンゴ酒を飲みながら、騒々しい陽気な声を上げる。アルコールを浴びるように飲んで、用意された簡素な食材に飛びつく。欲求に突き動かされるままに行動している様子が読み取れる。この場合でも、庶民階級の「食」は、「食欲」と密接に結びつけられている。それにひきかえ、部屋の中で御馳走を食べている会食者は、気づまりな雰囲気や窮屈そうにしている。貴族たちは開かれた窓からお祭り騒ぎを目にして、楽しそうな歌声を耳にすると、外の庶民と同様に自由に飲んで踊りたいと考えてしまう。貴族や聖職者の会食の陰気さと農民たちの陽気な騒ぎが好対照をなしているのは明白である²⁰⁾。

IV 社交としての「食」——経済的余裕のある地方貴族にとって

以上のように庶民層が「食」に本能的な欲求の充足を求めているのに対して、貴族が希求しているのは何なのか。彼らの食事風景は優雅である。貴族層は農民・漁師と違って肉体労働に追われることがない為、多くのカロリーを必要せず、食も細い。彼らにとって食事は食欲という本能を満たしたり、栄養を補給したりという身体的に必要な行為というよりも社交的な意味合いが強い。

『女の一生』においても、男爵家の人々が食欲を露わにする場面は非常に珍しい。小説前半で別荘に到着した直後の食事シーンでも、男爵夫人は馬車による長旅の疲れで全く飲み食いしないまま就寝してしまう。ジャンヌと父は食事を進めるよりも、微笑み合ったり、手を握ったりしながら、お互いへの愛情を確かめるのに専念している²¹⁾。食事場面であるにもかかわらず、二人が実際に食べ物を口に運ぶ様子は一切描写されない。食べ物の種類についても一言も触れられていないのは、特筆すべきであろう。

『女の一生』の中では、食事が人と人——特に貴族や

特権階層——を結びつける社交の場、すなわちある団体への帰属意識を高める場としてしばしば機能する。その証拠として、会食が知己を増やす機会を幾度も提供する点が挙げられる。ジャンヌと両親は別荘へひと夏を過ごしに来て、まず手始めに、この教区の精神的支柱と呼べる司祭を夕食に招く²²⁾。男爵夫妻は確固とした信仰を持っていた訳ではないので、宗教上の理由から司祭を自宅に招待したのではない。これは男爵一家が教区に快く迎え入れられ、コミュニティーの一員として認知してもらうのを目的とするのだろう。デザートの際になると、アルコールですっかり気持ちのほぐれた司祭は、近所に住む貴族の噂話を始める。実はこの会話をきっかけとしてジャンヌの結婚相手を選ばれるので、会食がジャンヌの人生を決定づける要素として働いていると指摘できよう。

このような例は枚挙にいとまがない。新しく教区民となった子爵が男爵らに紹介されるのもやはり食事の席である。食事をともにすることで新参の貴族を共同体の新しいメンバーとして承認する狙いがある。だからこそ、子爵と男爵夫人は共通の友人について語り合い、知人が多く存在する事実から、自分たちが同じ階層に所属する仲間だという事実を再確認し、絆を深めようとしている。これを契機に子爵ジュリアンは規則正しくジャンヌの家を訪問するようになる。その過程で二人の仲が深まっていくのである。二人が初めて遠出をする浜辺でも、宿屋の昼食で食卓は彼らを饒舌にさせ、その距離を近づける役目を果たす。ジュリアンが初めてジャンヌの小間使いに手を出すのも、男爵家で最初に食事をした日である²³⁾。また、ジャンヌが近隣に住むフルヴィル伯爵家と親交を深める際にも、モーパッサンは食事場面を活用している。伯爵は自宅を訪問してくれたジャンヌと親しく打ち解ける目的で夕食に誘うのだった²⁴⁾。さらに、新任の若くて狂信的なトルビアック司祭とジャンヌが親交を深めていくのも、食卓においてである。司祭は毎週ジャンヌの屋敷で晩餐の御馳走に預かる。2人は倫理的なトピックについて議論し、宗教問題を多様な観点から語り合う。司祭は食卓での会話を通して、ジャンヌとなら、この地方の道德面で墮落した民衆に尊敬される模範となれると結論付けたのである。これらの例から、食卓を囲むことは参加者の結束強化・同族意識の鼓舞に他ならないことが見て取れる²⁵⁾。

食物の共有が社交の開始を示すのは、貴族や聖職者に限らない。別の例を取り上げてみよう。馬車に紋章を描く仕事に従事している職人が男爵家にやってくる場面がある。彼は本来単なる職人であり、貴族とは全く異なる階級に属している。しかし、貴族の家の紋章を描くという仕事柄、貴族階級の家庭に頻繁に出入りする。当然のことながら、高貴な人々と言葉を交わす機会が多く、身

分が高いような錯覚を周囲に起こさせる。そのため、貴族と同じ食卓に着けるといって破格の特権にありつけてしまう。彼は食堂に案内されて、まるで紳士のように御馳走の供応に預かるのであった。同じ食卓を囲むことが階級的障壁を消滅させ、彼の社会的ステータスを引き上げるのに役立っているのが窺える。食事の儀式的性格が効果的に利用された例と言えるだろう²⁶⁾。

加えて、人と人が交流を始めるだけではなく、普段とは異なる特別な行為を行う舞台を提供する働きをも、モーパッサンは会食の場に与えている。現代においても相談事を持ちかける際に食事の場が少なからず設けられる点を考慮すれば、自然な成り行きと推し量られるだろう。

これは食欲が満たされたり、アルコールで精神が解放されたりすると、人々は気持ちが高揚して会話が滑らかになるからである。デザートの後ともなれば、食卓が活気づき、愉快的食事の後の遠慮なさがコミュニケーションを盛り上げる。ジャンヌが横暴な夫に自由を奪われ、陰鬱な毎日を送るようになると、クリスマスや元日に司祭と村長夫妻を食事に呼ぶのが単調な日々の連鎖を破るただ一つの気晴らしになってしまう²⁷⁾。別の例では、ジャンヌが冷え切った夫婦関係の修復を図るのが夕食の席においてであるのも興味深い。司祭から、ジャンヌが関係を改善したいと希望しているのを聞いて、ジュリアンは食卓で唇の隅にニヤリと笑うようなしわを寄せ、一種特別な表情で彼女を見る²⁸⁾。この後、二人の関係は一旦元通りになる。普段顔を合わせない人物や敵対している人物を食卓に集わせることに、モーパッサンは日常性の打破という役割も担わせている。

付け加えるならば、食物だけでなくアルコールが人を結び付ける働きを授けられることもある。近所に住む小作農家へ挨拶に出掛けたジャンヌは、歓迎のしるしに酒を飲まされる。一軒目のマルタン家の人々はもろ手をあげてジャンヌを歓迎し、果物の種で作った酒を一杯無理やり飲ませる。もう一軒のクイヤール家でもジャンヌは歓迎され、黒ずぐりの実で作った酒を飲む羽目に陥る²⁹⁾。他の例を挙げれば、妊娠したロザリの持参金に農園を与えると決めた際も、合意した契約を固めるために男爵とロザリの相手となる農夫はワインで乾杯する³⁰⁾。このようなアルコールの使用も「食」の儀式的な用法の一つに数えられるだろう。

V 没落と「食」が果たす機能の変化

しかし、ジャンヌの息子が作った借金の返済によって男爵家が没落していくのと同時に、ジャンヌを取り巻く食事風景は社交の場という公共性を徐々に失い、単なる生命をつなぐための手段に成り下がってゆく。

例えば、目覚めのカフェオレをジャンヌが幼い頃から行う習慣としてモーパッサンは設定していた。それを飲み干すと、布団をはねのけ服を着替え始めるのが、彼女の日課と描かれている。ところが、徐々にコーヒーを飲まずにぼんやり考えこんだり、二度寝したりするようになってしまう³¹⁾。儀式的色彩の濃いコーヒーは、ジャンヌが年齢を重ねるにつれて本来の意味を失い、そのような習慣自体も廃れていくのが判別できる。

多くの肉親を亡くし、先祖伝来の屋敷を手放し、小間使いと二人きりで田舎に引っ込んだジャンヌは、華やかな社交生活とは無縁になる。食事は孤独のうちに済ませる寂しい行為へと変貌を遂げてゆく。身分の低い女と駆け落ちした息子を探しにパリに出たジャンヌは、到着後すぐに宿屋で食事を取る。夜明けから何一つ食べていなかったのだ。一本のろうそくの火を頼りに、食卓を共に囲む者は誰もいないまま、侘しい食事を終える。まさに空腹を満たすためだけの食事である。翌日、息子を探してパリの町中を歩き回ったジャンヌの食事も同様である。疲労と空腹で倒れんばかりとなり、パン屋で買った小さなパンを歩きながら食べる。ジャンヌは喉も渇いて仕方なかったが、水を飲むにはどこへ行くべきか分からず、我慢せざるを得ない。その翌日、ジャンヌは全く同じ料理で食事を済ませている。パリでの食事には何の喜びもなく、ただ機械的に動作を進める描写しか認められない。食事はもはや虚栄や社交のために行われない。小説前半に繰り返し展開された、食欲と切り離された社会的な食事シーンからは想像できないほどの激変である³²⁾。遂に息子ポールの借金を返済するために屋敷を売り払った際、「うちにはいつでもベッドとシチューがポール様のために取ってありますからね」とロザリが女主人を説得する³³⁾。この「ベッド」と「シチュー」とは野宿や飢餓を回避できる最低限の寝る場所・食物を指している。ジャンヌは息子の借金を肩代わりしたために、わずかばかりの年金しか残されていなかった。ジャンヌの人生から一切の虚飾が取り払われ、「食」はただ生命を長らえる最後の命綱へと姿を変えている。

終わりに

モーパッサンは主人公ジャンヌに転落の人生を用意した。幸せな結婚という夢が破れ、夫と父の死、息子の借金返済により、ジャンヌは経済的な苦境に追い詰められてゆく。彼女が社会階層を転がり落ちてゆくにつれて、食事は貴族的な装飾や社会性を奪い取られ、本来の命をつなぐための必需品に戻ってゆく。これは、経済に疎く、生活力のないジャンヌやその両親・息子が不幸に陥っていく一方で、小間使いロザリやその息子が立派に自立して生きているという対照性、さらには新しい階層の力強

い息吹を象徴しているとも結論づけられるだろう。ロザリは貯金を続け、不動産を獲得し、ジャンヌとほぼ同等の財産を保有するに至っている。彼女は、係累を失い、経済的にひっ迫した女主人に代わって家政を切り盛りし、生きていけるだけの年金を用意してやるのだ。小説冒頭とは完全に主従の立場が逆転しているのが見て取れるだろう。

このように、時代の流れとともにブルジョワ階層が隆盛し、それと並行して貴族階級の没落が引き起こされた当時の社会情勢がストーリーの流れにも影を落としている。『女の一生』は時代設定が1819年から1848年に渡る。これは、モーパッサンの長編小説の中で唯一執筆時期とのずれを生じさせている。モーパッサンがこの時代を舞台に選んだ企図は、貴族階級支配の終焉を自然に見せるためではないだろうか。当時、大都市で力を付け始めていたブルジョワと対照的に、産業の発展と共に農地収入の相対的価値が下がり、貴族の経済基盤は緩やかな崩壊を迎えていた³⁴⁾。モーパッサンは「食」の形態が変容していく様子を提示することで、ジャンヌが代表する貴族階級の最期を示したかったのではなかろうか。

注

モーパッサンのテキストについてはプレイヤッド版長編集 *Romans*, Gallimard, 1987 によった。訳文については『女の一生』(新庄喜章訳 新潮社 1988) を参考にさせて頂いた。

- 1) 北川美香『『脂肪の塊』における食のテーマ』『仏文研究』27号 京都大学フランス語学フランス文学研究会1996 p.163. 同じく19世紀フランスの巨匠バルザックは、家の雰囲気や登場人物の性格を連想させるには食卓を描くことに勝るものはないと考えていた(アンカ・ミュルシュタイン『バルザックと19世紀パリの食卓』白水社2013 p.7)。
- 2) いくつか例を挙げれば、『身体フランス文学』(吉田城編 京都大学学術出版会2006)ではモーパッサンの『ベラミ』(1885)における食欲の社会学が論じられ、『世界の食文化16フランス』(北山晴一 農文協2008)では『ベラミ』に描かれた食事風景が取り上げられている。
- 3) 北川美香『『女の一生』の宴会場面に見るモーパッサンの描写技法』『仏文研究』31号 京都大学フランス語学フランス文学研究会 2000 pp.65-74.
- 4) デボラ・ラプトン『食べることの社会学』新曜社 1999 p.7
- 5) 鹿島茂『パリ風俗』白水社2012 p.109, 鹿島茂『馬車が買いたい』白水社2009 p.76,86参照。
- 6) 当時の1フランを現在の1000円に換算すべきという

解釈は『馬車が買いたい!』(p.189)による。

- 7) ギ・ド・モーパッサン『女の一生』新庄喜章訳 新潮社1988 p.12.
- 8) 同上, p.13,140.
- 9) 同上, p.55,89
- 10) 同上, p.37,126,140.
- 11) 同上, p.140,194.
- 12) 同上, p.359. 「2万フランなら承知ですが, 1500フランじゃ嫌です」
- 13) 同上, p.197.
- 14) 同上, p.62.
- 15) 同上, p.26,137.
- 16) 同上, p.28.
- 17) 同上, p.30.
- 18) 同上, p.31,137.
- 19) 同上, p.60.
- 20) 同上, p.73,76.
- 21) 同上, p.15.
- 22) 同上, p.36. 「司祭を大事にもてなした。」
- 23) 同上, p.171,208,271
- 24) 同上, p.202,208.
- 25) 同上, p.260.
- 26) 同上, pp.123-124.
- 27) 同上, p.136.
- 28) 同上, p.36,248.
- 29) 同上, p.120.
- 30) 同上, p.199. 「男爵は手打ちをした。(…)『ワインを一本もってこい!』約束を固めるために二人は乾杯した。」
- 31) 同上, p.358.
- 32) 同上, pp.347,352-53.
- 33) 同上, p.322.
- 34) 柴田三千雄, 樺山紘一, 福井憲彦編『フランス史2』山川出版社 1996 p.469.

引用文献

- ギ・ド・モーパッサン『女の一生』新庄喜章訳 新潮社 1988
- 北川美香『『脂肪の塊』における食のテーマ』『仏文研究』27号 京都大学フランス語学フランス文学研究会 1996 pp.163-174
- デボラ・ラプトン『食べることの社会学』新曜社 1999
- 吉田城編『身体フランス文学』京都大学学術出版会 2006

参考文献

- 鹿島茂『馬車が買いたい』白水社 2009
- 鹿島茂『パリ風俗』白水社 2012
- 北川美香『『女の一生』の宴会場面に見るモーパッサンの描写技法』『仏文研究』31号 京都大学フランス語学フランス文学研究会 2000 pp.65-74
- 北山晴一『世界の食文化16フランス』農文協 2008
- 河野健二編『フランス・ブルジョア社会の成立』岩波書店 1977
- 柴田三千雄, 樺山紘一, 福一憲彦編『フランス史2』山川出版社 1996
- アンカ・ミュルシュタイン『バルザックと19世紀パリの食卓』白水社 2013